

『ドイツ・イデオロギー』の櫛田・森戸訳と廣松渉版

渋谷 正（鹿児島大学）

はじめに

『ドイツ・イデオロギー』の「フォイエルバッハ」章が原語のドイツ語ではじめて公表されたのは、1926年に刊行された『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』の第1巻においてである¹。編集者の名を取ってリャザーノフ版と呼ばれるこの版本は、戦前の日本で直ちに翻訳されることになった。日本における『ドイツ・イデオロギー』の翻訳史は、ここに始まる。この翻訳史を今日の時点で洗い直すことは、日本の『ドイツ・イデオロギー』研究史、とりわけ今なお誤った評価をともなって普及する廣松版（岩波文庫版を含む）を正確に位置付けるために不可欠の課題であろう。

1. 櫛田・森戸訳

リャザーノフ版の刊行年と言われる同じ1926年の5月・6月に、その翻訳が、櫛田民蔵と森戸辰男の訳文で、「マルクス・エンゲルス遺稿『^{ドイツ・イデオロギー} ; 獨逸的觀念形態』の第一篇＝フォイエルバッハ論」として雑誌『我等』（長谷川如是閑、大山郁夫、河上肇の刊行）の第8巻第5・6号に公表されたのであり、これが、「フォイエルバッハ」章の日本初の翻訳である。

この翻訳は、訳稿に改訂を施して、『マルクス・エンゲルス遺稿／ドイッチェ・イデオロギー』という書名で、1930年5月に我等社の『我等叢書』の第4冊として上梓された。

雑誌『我等』に掲載された翻訳では、リャザーノフ版における「編集者序言（Einführung des Herausgebers）」、脚注、いわゆる「清書稿」の前半部は、省略された。この省略の理由について、後続の『我等叢書』の「編者例言」では、「或る事情から極めて急速に仕事を運んだために」²と述べられている。「或る事情」が何を意味しているのは不明であるが、初訳が、底本が刊行された同じ年に公表されたことを考えれば、全文を訳出する暇がなかったことも一因であろう。

『我等叢書』第4冊の翻訳は、雑誌『我等』で省略された「編集者序言」と脚注も含むリャザーノフ版の全訳である。『我等叢書』では、『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』

¹ Marx und Engels über Feuerbach, Der erste Teil der „Deutschen Ideologie“. Herausgegeben von David Rjazanov. In: Marx-Engels-Archiv, Zeitschrift des Marx-Engels-Instituts in Moskau, I. Band, Frankfurt a.M. [1926].

² 『我等叢書』第4冊、1930年、2ページ、参照。

第1巻のなかに「1844年－1847年のマルクスの手帳」から直接掲載された「フォイエルバッハ・テーゼ」も河上肇によって訳されるとともに、『アルヒーフ』で公表された「テーゼ」のファクシミリも転載された。

特筆すべきは、『ドイツ・イデオロギー』の本邦初訳においてすでに、リャザーノフ版でテキストのなかに組み込まれた抹消箇所の内容も訳出されたことである。戦前期にはじめて『ドイツ・イデオロギー』に接した日本人研究者も、この草稿の改稿過程に強い関心を払っていたのであり、『ドイツ・イデオロギー』の執筆過程をめぐる日本の研究史は、ここにその礎石を据えられたと断言してもいい。

たとえば、「フォイエルバッハ」章の草稿10ページ（マルクスのページ付け）の冒頭部について、リャザーノフ版は、抹消箇所を本文のなかに次のように組み入れる。

so <kommt er nicht dazu, die Mens[chen]> die <wirklichen, individuellen, leibhaftigen> Menschen nicht in ihrem gegebenen <[ge]schichtlichen> gesellschaftlichen Zusammenhange, nicht unter <seinen> ihren vorliegenden Lebensbedingungen, die <ihn> sie zu dem gemacht haben, was sie sind, auffaßt,³

アングル・ブラケットの中は抹消箇所である。この文章は、『我等叢書』で、抹消箇所も含めて次のように翻訳された。

「<人類が云々であることに想到しない><現実な、個人的な、肉体を有する>人類は彼等の所与の<歴史的な>社会的関連において、<彼を>彼等を現に見るところのものに作りあげたところの、<彼の>彼等の現在当面の生活諸条件の下において理解せられていない。」⁴

この訳文では、抹消箇所が、リャザーノフ版と同様にアングル・ブラケットに入れられて、底本に忠実に訳されている⁵。

ところで、リャザーノフ版は、抹消された語句は復元したが、それに代えてエンゲルスが行間や欄外に加筆した語句がどれであるのかを報告しなかった。マルクスによって加筆された語句が、脚注で示されているだけである。エンゲルスによる加筆を伝えなかったことが、リャザーノフ版の最大の難点であった。

上掲の10ページの当該箇所をオリジナル草稿にもとづいて復元すれば、次のようになる。
<so kommt er nicht dazu, die Mens> d<en>ie <wirklichen, „individuellen, leibhaftigen> Menschen

³ Siehe Marx-Engels-Archiv, I. Band, S.244. リャザーノフ版は、抹消語の報告についてかなりの遺漏がある。上掲の引用文で、ihrem gegebenen の前に記されるべき seinem という抹消語が報告されていないし、Mens[chen] の直後の die は、den を die に変えたものである。また、文頭の so は、『ドイツ・イデオロギー』の草稿では抹消されており、この語を抹消としないのは、リャザーノフ版の誤りである。さらに、individuellen の前と Menschen の後に記されて抹消された引用符が見落とされている。

⁴ 『我等叢書』第4冊、90ページ、参照。

⁵ 雑誌『我等』の初訳では、リャザーノフ版で用いられたアングル・ブラケットが、小かぎ「 」と丸括弧（ ）に変えられている。上掲の引用文では、「歴史的」と「彼を」が丸括弧に入れられ、他の抹消箇所は小かぎに入れられている。小かぎと丸括弧の区別の理由は、不明である。なお、この引用部分でも、『我等叢書』の訳文は『我等』に比べてかなり改善されている。

<> nicht in <seinem> *ihrem* gegebenen ges<chichtlichen> *ellschaftlichen* Zusammenhange, nicht unter <seinem> *ihren* vorliegenden Lebensbedingungen, die <ihn> *sie* zu Dem gemacht haben was sie sind, auffaßt,⁶

この復元文のなかで、イタリック体にしたものが、抹消の後で加筆された語または語の一部である。リャザーノフ版では、例えば、2行目の *seinem* を抹消して書き換えられた語が *ihrem* であるという事実を知り得ないのである。

エンゲルスによる加筆をはじめて知らせたのは、1932年に刊行されたアドラツキー版である。アドラツキー版の巻末の「テキスト異文 (Textvarianten)」では、エンゲルスの加筆が、「^e」という記号を用いて報告されているが、この版の刊行以前には、エンゲルスが加筆した語がどれであるのかを知ることができなかった。

しかし、アドラツキー版の刊行以前に、エンゲルスの加筆を推測した翻訳が出版された。『我等叢書』第4冊の3カ月前の1930年2月に出版された由利保一訳・竹沼隼人関『リャザーノフ編、マルクス・エンゲルス遺稿、ドイッチェ・イデオロギー、第一篇、フォイエルバッハ論』が、それである。

この翻訳も、抹消箇所の訳出を含むリャザーノフ版の全訳であるが、しかし、ここでは、リャザーノフ版にはない独自の工夫がなされた。この翻訳では、訳文に「側線」が付けられており、これについて、凡例を記した「訳者より」で、翻訳中の「側線」について次のように述べられている。「抹殺語句の次に続く本文の語句に附した側線は、抹殺語句を本文と併せ読み続ける場合には側線を附した部分だけを除いて読む続くべきであることを示す符号である」⁷。したがって、「側線」は、抹消語がある場合に、抹消の後で加筆された語句を消して、最初の文案を知らしめるという工夫である。

上掲の草稿10ページの当該箇所は、由利訳では次のように訳出されている。

「(現実の、個々の、肉体をもてる) 人間をその一定の ((歴) 史的) 社会的關係に於いて、(彼を) 彼等を彼等が現にあるが如きものに作り上げた所の (彼の) 彼等の現在の生活条件の下に於いて、解釈することをしない」⁸ (由利訳は縦書きなので、引用文の下線は、縦書き文章の右横に付けられた「側線」)

由利訳では、パーレンに入れられた (彼を) と (彼の) を読んで、下線が付けられた「彼等」(正確には「彼等を」と「彼等の」を除けば最初の文案が読み取れるというのである。由利訳の「側線」は、上掲の草稿復元文と比べれば分かるように、エンゲルスの加筆語を意味している。正確には、引用文の1行目における「その一定の」の「その」と「社会的」

⁶ 渋谷正編・訳『草稿完全復元版ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、1998年、別巻「注記・解題」、43ページ、注記1)、参照。

⁷ 由利保一訳・竹沼隼人関『ドイッチェ・イデオロギー』、永田書店、2ページ、参照。

⁸ 同上、58ページ、参照。抹消文は、由利訳では、アングル・ブラケットではなく、パーレン () に入れられた。リャザーノフ版の冒頭の <kommt er nicht dazu, die Mens[chen]> という文章は、由利訳では、本文ではなく脚注で「するが故に彼は人 [間] を《……》するに至っていない」と訳されている。

とも「側線」が引かれなければならないが、驚くべきことに、由利訳では、草稿の当該箇所に関しては、草稿そのものを見ることなくして、その記載状態をほぼ正確に復元する翻訳が行われたのである。オリジナル草稿に拠らずに加筆語を特定するためには、推測によるほかないが、アドラツキー版の刊行以前に、草稿の執筆過程に関するこのような探究があったことは、『ドイツ・イデオロギー』研究史上銘記すべきである。

2. 廣松渉版

1932年にアドラツキー版が刊行されたあとで、『ドイツ・イデオロギー』の草稿を寸断して配列するこの版本が、戦前の唯物論研究会によって、「一の完成体」を提示するものとして熱狂的に迎え入れられた。アドラツキー版の翻訳は、1935年と1936年に同会によって刊行されたが⁹、『ドイツ・イデオロギー』研究はここに屈折点を迎えた。

廣松渉氏は、草稿の暴力的な配列を行ったアドラツキー版を「偽書」と呼び、廣松版では、リャザーノフ版と同様に、テキストがマルクスのページ付けに従って配列された。しかし、廣松版における修正過程の復元は、「偽書」であるアドラツキー版に全面的に依拠したものであり、アドラツキー版の根本的な欠陥をそのまま引き継いだ。この意味で、廣松版は、『ドイツ・イデオロギー』の編集史を1932年の水準に逆行させ¹⁰たのである。

草稿10ページの前掲の箇所は、廣松版の「原文テキスト篇」では次のようになっている。
 <…so kommt er nicht dazu, <<die Mensch [en]>> den „wirklichen, individuellen, leibhaftigen Menschen“ nicht in seinem gegebenen geschichtlichen Zusammenhange, nicht unter seinen vorliegenden Lebensbedingungen, die ihn zu dem gemacht haben, was hierbei in der Theorie hält, die Menschen nicht in ihrem gegebenen gesellschaftlichen Zusammenhange, nicht unter ihren vorliegenden Lebensbedingungen, die sie zu dem gemacht haben, was sie sind, aufbaut,¹¹

廣松版のこの復元文は、アドラツキー版のテキストの34ページ、13行目に、アドラツキー版巻末の「テキスト異文」に載せられた抹消文（「テキスト異文」の571ページ）をそのまま組み込んだものである¹²。廣松版がアドラツキー版とわずかに異なっているのは、廣松版の抹消文の末尾に、gemacht haben, was が付け加えられていることだけである。廣松版では、was のあとに注を付けて、脚注で「この< >内の一文をwas まで書いた時点で添削」と記されている。これについて、新MEGA試作版の「異文明細 (Variantenverzeichnis)」では、「was」
と表記されており、「/」は、どの語まで書き進んだときに修正がなされたのかを示す記号で

⁹ 唯物論研究会訳『アドラツキー版／ドイツ・イデオロギー』ナウカ社、第1分冊、1935年12月、第2分冊、1936年1月、第3分冊、1936年4月。

¹⁰ 渋谷正『『ドイツ・イデオロギー』はいかに編集されるべきか(中)』『経済』、新日本出版社、2004年2月、174ページ、参照。

¹¹ 廣松渉編輯版『ドイツ・イデオロギー』、「原文テキスト篇」、河出書房新社、1974年、20ページ、参照。下線と二重下線を付したのは渋谷。

¹² Siehe Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5, 1932, S.34 und 571.

なければならなかった。廣松版では、「was/」の表記を採用しながら、アドラツキー版の欠陥を克服する *Zeilenparallelisierung* は、まったく顧慮されることがなかったのである。廣松氏は、試作版の「異文明細」を「さながらクイズばり」と言って、実用に耐えないものとして一蹴したが、試作版の新たな復元方法の意義が理解されていなかったと言うほかない。

廣松版における修正過程の復元がアドラツキー版を底本とするものであることは、1996年に渋谷が指摘する（『経済』、同年6月号）まで、日本で長く知られることがなかった。アドラツキー版を「偽書」と指弾した廣松氏自身が、このことにつけて触れなかったからである。廣松版を『ドイツ・イデオロギー』の研究史上に位置付ければ、廣松版は、一方で、草稿の配列についてリャザーノフ版の配列（日本の翻訳史で言えば、櫛田・森戸訳および由利訳の配列）に戻し、他方で、新MEGA試作版の学術的成果を取り入れず、修正過程の復元の水準をアドラツキー版まで逆行させたと言わねばならない。

2002年に、『ドイツ・イデオロギー』の岩波文庫版が出版された。これは、「廣松渉編訳、小林昌人補訳」と称していながら、けっして1974年の廣松版ではなく、廣松版を大きく改変したものである。草稿10ページの当該箇所は、次のように訳されている。

「<現実の、個体的な、身体を具えた人間を>人間たちを、所与の<歴史的>社会的連関において、また<人間の>人間たちの眼前にある生活諸条件——これが<人間を>人間たちを現にある姿たらしめた——の下において把握しないので」¹⁴（太字はエンゲルスの加筆を示す）

この訳文を上掲の廣松版の独文と比較されたい。岩波文庫版では、廣松版における語句の誤った重複が取り除かれているのである。すなわち、*gegebenen*（文庫訳では「所与の」）、*Zusammenange*（「連関」）、*nicht unter …vorliegenden Lebensbedingungen, die …zu dem gemacht haben, was*（眼前にある生活諸条件——これが…姿たらしめた——の下において）は、最初に書かれた語を活かしたもとして表記されている。

この訳文を、渋谷版の表記と比較してみよう。

「<それだから、彼は、人[間たち]を…に到達しない><現実的な、個人的な、肉体を備えた>人間たち<>を<彼の>彼らのあたえられた<歴史的>社会的関連のなかで把握せず、<彼を>彼らを現にあるものした<彼の>彼らの当面の生活諸条件のもとで把握しないので」¹⁵

岩波文庫版の改変は、その4年前に刊行された渋谷版にもとづくものである。岩波文庫版の「解説」では、この重大な改変について一言も触れられることなく、そして、廣松版がアドラツキー版を底本とするものであることもまた直隠しに隠されている。

廣松版を日本における『ドイツ・イデオロギー』の翻訳・研究史のなかに正確に位置付けることなしには、この草稿の研究の進展はありえない。

¹⁴ 廣松渉編訳、小林昌人補訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』岩波文庫、2002年、49ページ、参照。岩波文庫版では、この短い文章でも誤りが多い。草稿の当該箇所冒頭の抹消文（*so kommt …Mens*）が脱落しており、「身体を具えた人間」の「人間」は抹消ではなく、他にも脱落がある。

¹⁵ 渋谷正編・訳『草稿完全復元版ドイツ・イデオロギー』、50ページ、52ページ、参照。斜体は、加筆された語句を示す。